

柴田陽一著

『帝国日本と地政学』

——アジア・太平洋戦争期
における地理学者の思想と実践——

山崎孝史

本書は「日本地政学」と呼ばれる学知の展開を、帝国主義下の日本本国と植民地たる満州国の双方について、膨大な史料と関係者の証言から丹念に解明している。副題は「アジア・太平洋戦争期における地理学者の思想と実践」であるが、この「地理学者」とは、「日本地政学」を唱導した京都帝国大学地理学教室の小牧実繁教授（当時）を中心とする教員および教室出身の研究者たちを指す。著者の柴田氏も京都大学大学院文学研究科（地理学専修）で博士後期課程を研究指導認定退学したあと二〇一七年三月まで同大学人文科学研究所研究員であった。つまり、本書は、満州事変から第二次世界大戦期にかけて、当時の地理学教室でどのような研究がなされたのかについて、同教室の出身者自らが解き明かした成果である。

評書
周知のように、京都帝国大学地理学教室は一九三〇年代の末から日本における地政学研究の一つの核となる。「地政学」とは、伝統的には二〇世紀初頭のヨーロッパにおいて、地理的環境から外交・軍事の分析を行い、国策への応用を目指した学問ないしそ

の営為を指す。本書が対象とする「日本地政学」については、一九九〇年代の末まで体系的な研究がほとんどなかった。その後、小牧が主宰した地政学研究グループ「総合地理研究会」の活動に關する新たな史料が発見・公開されてから、進展するようになった。本書はそうした研究の現在の到達点を示す貴重な労作である。本書が明らかにするように、小牧らのグループは、第二次世界大戦期において日本固有の地政学思想たる「日本地政学」の確立と普及、陸軍外郭団体（皇戦会）への情報提供、植民地への調査研究人材の派遣などを行っていた。これらの活動について、本書は従来の研究よりもはるかに実証的かつ包括的なアプローチを通して、帝国主義と戦争への学知の関与を多面的に描写している。とりわけその実践面での貢献を、批判的視点を失うことなく、評価している点にも特徴がある。

まず、本書の構成を概観しておこう。目次は左記のとおりである。

- 第1章 序論
- 第1部 本国における地政学の展開——「日本地政学」を例に
- 第2章 「日本地政学」の思想的確立——小牧実繁の個人史的側面に着目して
- 第3章 陸軍の戦略研究における総合地理研究会の役割
- 第4章 「日本地政学」と思想戦——小牧実繁のプロバガンダ活動の展開とその社会的影響

補論1 総合地理研究会のメンバーとその周辺の人物の略

- 第Ⅱ部 植民地における地政学の展開——「満州国」を例に
 第5章 「満州国」における地理学者とその活動の特徴
 第6章 建国大学の宮川善造と「満州の地政学」
 第7章 満鉄調査部の増田忠雄と地政学——「文化圏」研究と地政学への思想的展開
 第8章 結論

補論2 本書で取り上げた地理学者たちの戦後
 補論3 戦前の欧米諸国および日本における地政学の動向
 第1章では、日本内外の地政学研究が展望され、従来からある「日本地政学」の非科学性への批判に留まらず、関係者の活動の多面性と共に、成立過程、大衆的支持の要因、社会的影響を探る視点の重要性が強調される。

第1部を構成する第2章から4章では、「日本地政学」を主導した小牧の思想的な確立過程が検討され、総合地理研究会による陸軍関係者に向けた戦略研究の内容と、「思想戦」とされるプロバガンダ活動について詳述される。第1部はこれまで十分明らかにされていなかった事実を解明しており、本書のハイライトとして最も注目すべき部分である。ここで著者は「皇道地政学」を標榜するに至った小牧の思想的指向性や小牧グループの出版・講演活動を、社会的影響力をもった「実践」として積極的に評価する。第Ⅱ部を構成する第5章から7章では、日本の植民地であった「満州国」に派遣された地理学教室出身者、すなわち建国大学で教鞭をとった宮川善造と満州鉄道調査部で研究調査に従事した増田忠雄の個人史が綴られる。両者ともに小牧グループの中核的メ

ンバーではなかったが、それぞれ独自に「満州の地政学」を構想した。著者はそれらと小牧らが国内で提唱した「日本地政学」との異同について検討する。

このように、本書は「日本地政学」の成立過程を縦糸に、その「満州国」での展開を横糸にして、そこに三つの補論を織り込むことで、日本における地政学成立の歴史的断面を体系的かつ包括的に明らかにしている。参照された文献の量と新たに発見された史料の価値からも、本書は他の追隨を許さない「日本地政学」研究となっている。戦前の地理思想史を考える上で、本書が重要な道標の一つとなることは間違いない。

本書に関しては、既にいくつかの書評が著されている。遠城明雄は当時の京都帝国大学における哲学京都学派との思想的差異から本書の意義を評価し、川合一郎は「タブー視」、「異端視」されていた地政学の歴史を地理思想史の中に位置づける業績と讃えるなど、学界でも高い評価を得ている。もとより評者が「日本地政学」について知る部分は、著者にはるかに及ばない。しかしながら、評者はこれらの評価に同意しつつも追従することなく、一政治地理学者として独自の観点から本書を批評してみたい。

*

まず、第1章において著者は、ハウスホーファーの治績に関するヘニング・ヘスケラによる戦後の（誇張・誤解を史実から正すという意味での）「修正主義的」研究をベースに、「日本地政学」の社会的な実践の側面に光をあて、また本国に留まらず植民地も視野に入れ、地政学の全体像を解明するアプローチをとる。このスタンスは高く評価できるが、著者はこうした従来の研究が看過

してきた「日本地政学」の多面的側面を見ることを一つの「批判的」なアプローチととらえているようである。補論3（講演録）で著者が「批判地政学 Critical Geopolitics」に何度か言及するのにも、自らの方法的立場と重なる部分があるからであろう。

ただ、著者が依拠する文献実証主義の認識論と、批判地政学の主流派が依拠するフェミニズム、ポスト構造主義、あるいはポスト植民地主義の認識論には懸隔があると考えられる。後者は、伝統的な地政学の権力的な構成・効果とその疑似科学性を言説面から批判的に検討する分野でもある。著者は「日本地政学」を社会的実践という点で肯定的に評価しており、「科学性は低いが実践性は高い」という判断は、批判地政学の立場からは、議論の余地はあろう。この実践性こそが地政学という言語行為やパフォーマンス、すなわち「地政言説 geopolitical discourse」の政治的側面を示し、批判地政学はそれを問題化するからである^④。

また、地政学ないし地政学的思考は近代以降現在に至るまで再帰的に立ち現われる思潮でもある。地政学を考える上で、この点は極めて重要である。しかも、地政学的思考は現在の地理学の理論的、方法的、そして倫理的問題とも関わる。そうした現代世界を含む、さらに広い観点から「日本地政学」は再評価されねばなるまい。その点で、本書は地理学における政策応用の問題を再考する上で貴重な歴史的教訓を提示している。

本書のハイライトとなる第Ⅰ部は、最も慎重な読解が必要とされる部分である。著者は「文献実証主義の姿勢を堅持する」としながらも、小牧の思想的変遷について、彼の精神的内面にまで踏み込んだ解釈を示す。また、著者自身が「日本地政学」に対して

価値判断を示す部分があるが、その根拠が必ずしも明確ではない。著者が「日本地政学」の妥当性を評価する際、既存の批判と併記することが多く、著者の立場がややわかりにくいのである。むしろ、既存の批判を史実から修正する立場をもっと鮮明にしても良かったのではなからうか。

これと関連して、「日本地政学」の「光」と「影」を同一次元で並列させる本書の主張にも留意が必要である。著者も繰り返すように、学問が実社会にコミットすることは決して否定されることではないが、結果的に「日本地政学」が植民地支配や侵略戦争を支持したことは、実証の次元を超えた学知の倫理的問題として、これからも立ち現われ続ける。この問題を避けて、地理学が地政学の過去や現代政治と向き合うことはできない。その際に「日本地政学」の教訓を実際の学問的営為の中でどう活かすかは、その是非の評価と関わる政治的な判断を含んでしまう。

とはいえ、実際の総合地理研究会と陸軍との関係は、本書も明らかにするように、間接的なものであった。研究会の活動は、陸軍外郭団体（皇戦会）や国策会社（昭和通商）からの依頼と資金を受けたものであり、「民間のシンクタンク」として地誌的情報の提供や戦略論的助言を行っていたとされる。学外とはいえ、帝国大学関係者による秘密裏の活動を「民間」と希釈して表現することは留保したいが、ハウスホーファーの例と同様に、地理学者と軍部との関係の特定とその評価は必ずしも容易ではない。むしろ、著者が主張するように、地理学者たちの地政学的実践をどう評価するかが、現在においても重要であろう。

こうした「日本地政学」の倫理的両義性については、日本の地

政治学を、西洋諸国が展開する帝国主義的世界秩序へのオルタナティブとして、その問題性を認識したうえで、評価しようという主張がある。例えば、佐藤健は小牧らの「日本地政学」と『世界地理政治大系』による地政学的な地誌記述の目的は、西洋諸科学による世界像の歪曲を正すことにあり、その本質を「反西洋世界観から生み出される西洋秩序への批判なのであり、皇道という曖昧なユートピア像に代替された新たな世界観を核とし、地誌研究による「本然の姿」の解明という方法論を用いることで多元的世界観に色づけされた、日本の利益を優先させる新秩序の模索であった」とする。つまり佐藤は「日本地政学」を「近代主義的世界観への批判の先駆」として評価しつつ、「結局はウルトラ・ナショナリズムと恣意性に彩られた彼らのための「科学」の推進にすぎなかった」と結論づける。^⑧

著者も「日本地政学」が日本の主体性を明確にし、「その存在そのものが近代ヨーロッパ批判・植民地主義批判たり得ていた」とし、「当時日本に存在した他の地政学とは異なり、人間の意志や精神や感情の領域まで足を踏み入れようとする性格を有し」、「それ自体は人間精神の重視と解することもでき、一概に否定されるものではない」と評価する。著者はそれが「日本の絶対性を確信するあまり、日本の行為を相対化する視点を欠い」としつつも、「終戦」による地政学の断絶が「戦後、地理学研究における主体性の議論を忌避させた」一因となったとする。

いずれの論考も、小牧が主張した「欧米帝国主義への抵抗としての地政学」という側面を「主体的な世界観」の提示として評価している。確かに帝国主義国家ごとに構想された多様な地政学に「八紘為宇」を掲げる「皇道」の原理が持ち込まれている。^⑨ 欧米列強の支配に対抗して、アジアという多様で広大な空間を統治する論理を構築するなら、この種の原理的工夫が求められるが、「日本地政学」はこの点でどう評価できるのだろうか。

本書に沿うならば、小牧グループの一連の著作は「無自覚な一元論」、「実証性の欠如」、「日本の優越感に基づく独善的記述」としてほとんど評価されていない。これが事実であれば「日本地政学」とは新世界秩序構築への構想としておよそ論理性や実効性を備えていなかったことになる。その一方で、著者は小牧のプロバガンダ活動の組織的性格、提示した地政学的世界観の独自性、地理学による社会的実践への参与といった点を評価している。著者の「日本地政学」評価は、このように是と非の間を大きく揺れる傾向があり、その真意をやや捉えにくくしている。

第II部での、帝国主義の前線に派遣された地理学者、宮川と増田それぞれの意欲と葛藤の描写は大変興味深い。「満州国」において、彼らの地政学的世界観が、科学の主体性と実践性、有機体的国家と植民地との関係、あるいは日本の対外政策と学問観の変化を通して形成される過程は、植民地と地理学（者）との関係を浮き彫りにする。

なかでも評者の目を引いたのは、宮川が「満州の地政学」を構想する中で、本国の「日本地政学」が持つ皇道主義を批判していた点や、中国人学生による彼の講義評価が芳しくなかった点など、帝国の周辺（植民地）で構想された地政学には、その中心で構築されたものやや異なった様相が認められることである。

はいずれの帝国にも一元化されない多元的な世界が含意されている。しかし、日本が主導した「共栄圏」には、そのような多元的世界は実現されなかった。帝国主義国家の対立の中で立ち上がる国家や帝国が、その内部領域においても多元的世界の原理を貫徹することは困難で、内部統合強化のための社会的文化的な一元化の力学が働くことは歴史が証明している。

「日本地政学」もまた、佐藤のいう「萌芽と危険性」、あるいは著者がいう「光と影」の並存ではなく、外には世界の多元化の内には植民地支配という一元化のベクトルという矛盾を不可避的に内包していたのであろう。この点について久武哲也は、「日本地政学」におけるハワイの見方に、米国による先住民排除と植民地化を批判し、植民地化以前の「本然の姿」への回復を主張しながら、ハワイへの日本人移民の促進と日本による植民地化を構想するという、統治論理の「反転」があると指摘している。^⑩

重層化する空間の統治に関する構想には、構想自体の両義性、つまり空間のスケールごとに構想の様相（是非）が一八〇度異なって見えることがある。これは「スケールのゲシュタルト」と呼ばれる。^⑪ つまり、重層化したいずれの空間（世界か、共栄圏か）を見るかで地政学の相貌（見え方）が反転するのである。地政学を全体的に評価するには、こうした立体的・重層的に構成された空間統治の論理としても、吟味されねばなるまい。

その点では、哲学京都学派を代表する西田幾多郎が一九四三年に軍部に提出した「世界新秩序の原理」には、多元的な世界秩序に至る過渡的形態として、日本が主導する「東亜共栄圏」が構想されており、多様性を持つ「東亜」を取り結ぶ「工夫」として、

主任教授の座にある小牧の力は絶大であったと想像される。戦時下とはいえ数年の間に、教室出身の研究者や所属学生を「日本地政学」の下に束ねていくリーダーシップ、帝国大学教授として軍部やマスメディアとのネットワークを構築する手腕を鑑みれば、確かに小牧は集約的な研究体制を確立・推進し、その成果を広く社会に普及していく力量を備えていたと思われる。

同時に、こうした彼の資質は、総合地理研究会外の地政学研究も、そして学内の哲学京都学派や探検地理学会のメンバーとの距離も作り出していたと思われる。「日本地政学」の非科学性に対する数々の批判に対して、小牧がともに反論した形跡もあまり見当たらない。満州で「日本地政学」を批判した宮川に小牧は冷淡であったようであるし、地理学教室や総合地理研究会のメンバーの中で小牧に対する異論がどの程度あったのかという点も気になる。平時なら、同じ分野に複数の研究者が存在すれば、討論や相互批判を通して学問は磨かれる。しかし「日本地政学」にこれら周辺からの相対化を通して、学問としての自己成長があり得たのかについては、本書からも窺い知れない。資料的に可能であれば、「科学の社会学」的な観点からの検討も期待される。

加えて、本書は「日本地政学」を形成・普及し、植民地にまで波及させた研究者たちの目線を通して記述されている。もちろんそれは対象や資料の性格から避けられないことであるが、そこから導出されるのは植民者側の地政学史である。唯一の例外は、宮川の講義を受けた中国人学生たちがその内容に反発したという回想の部分である。著者は引用した回想録について「中国人の回想には戦後の政治体制が色濃く反映されている」と留保するが、

こうした人々の声を拾い上げることは、植民者の地政学史を限定的にせよ「多声化」することに繋がらないだろうか。

評者はかつて「政治の地理学」（研究としての政治地理学）と「地理学の政治」（実践としての応用地理学）は相互に関わるが混同できないと記したことがある。後者は「地政学」と言い換えても良い。一九世紀末にヨーロッパで成立した政治地理学は、国家有機体説や環境決定論を抱え込んだまま、地政学へと変貌していく。その結果として、戦後に地政学は途絶し、始祖たる政治地理学もその道連れとなる。一九八〇年代に英米を中心に復興する政治地理学は、こうした地政学の批判的再検討を経て「政治の地理学」として再構築される。

もし「日本地政学」が、著者が再三強調するように「科学性は低いが実践性は高い」学知として再評価され得るのであれば、「日本地政学」の実践性はその科学性によって担保されないということになる。つまり「学」とは修辞であり、実態は地政言説の生産、つまり政治的行為となる。であれば、「日本地政学」の実践性の評価とは、その「(地) 政治¹³⁾」としての評価に他ならない。そして、この(地) 政治は植民地主義、皇道主義、民族主義などを含み、それなしに当時の軍関係者に注目されたり、大衆に受容されたりすることもなかったであろう。今西錦司らによる「日本地政学」の科学性への厳しい批判をみると、ここでの実践性とは科学性の欠如と裏腹の関係にあったとも言える。科学性と実践性をトレードオフとした点で、評者にとって「日本地政学」は一種の「反面教師」であり、現在の地理学はそこから貴重な歴史的教

訓を学ぶべきであろう。

最後に、多様な史料を駆使した重厚な本書を読み通すのは決して容易ではなかったが、これまで明らかでなかった「日本地政学」の実態にここまで著者が迫ったことは、敬服に値する。また、今後も未解明の領野に取り組もうとする著者に対して大きなエールを贈りたい。

- ① 大阪市立大学地理学教室編『空間・社会・地理思想』六号、二〇〇一年。
- ② 遠城明雄「柴田陽一著『帝国日本と地政学 アジア・太平洋戦争期における地理学者の思想と実践』清文堂、二〇一六年」人文地理六八巻三号、二〇一六年、三七四―三七五頁。
- ③ 川合一郎「柴田陽一著『帝国日本と地政学—アジア・太平洋戦争期における地理学者の思想と実践』清文堂、二〇一六年」歴史地理学五八巻五号、二〇一六年、三九―四二頁。
- ④ 山崎孝史「政治・空間・場所——「政治の地理学」に向けて【改訂版】」ナカニシヤ出版、二〇一三年、一四三―一四六頁。
- ⑤ 山崎孝史「地政学の相貌についての覚書」現代思想四五巻一八号、二〇一七年、五一―五九頁。
- ⑥ 山崎孝史「地理学のポリテイクスと政治地理学」人文地理五八巻四号、二〇〇六年、四一―六二頁。
- ⑦ 「民間のシンクタンク」という表現は以下の論考が用い、著者がそのまま引用している。小林茂・鳴海邦匡「総合地理研究会と皇戦会——柴田陽一「アジア・太平洋戦争期の戦略研究における地理学者の役割」の批判的検討」歴史地理学五〇巻四号、二〇〇八年、三〇―四七頁。
- ⑧ 佐藤健「日本における地政学思想の展開——戦前地政学に見る萌芽

と危険性」北大法学研究科ジュニア・リサーチ・ジャーナル二巻、二〇〇五年、二二七頁。

- ⑨ 久武哲也「ハワイは小さな満州国——日本地政学の系譜（承前）」現代思想二八巻一号、二〇〇〇年、六〇―八二頁。
- ⑩ 山崎孝史「知事・市長意見交換会の言説分析からみた大阪都構想」市政研究一七三号、二〇一一年、八四―九四頁。
- ⑪ 前掲山崎、二〇一七年、五六―五七頁。
- ⑫ 前掲山崎、二〇一三年、二一九頁。
- ⑬ 地政学を意味するドイツ語の Geopolitik、英語の geopolitics、中国語の地縁政治はいずれも「大地に関わる政治」地政治」という意味を含む。
- ⑭ 山野正彦「探検と地政学——大戦期における今西錦司と小牧実繁の志向」人文研究五一巻一二分冊、一九九九年、一―三二頁。

(A5判) viii+四二二頁 二〇一六年三月 清文堂 九六〇〇円+税
(大阪市立大学大学院文学研究科教授)